

書評 小宮京『語られざる占領下日本 公職追放から「保守本流」へ』

(NHKブックス、二〇二二年)

竹 内 桂

はじめに

本書は、日本政治史研究を牽引する著者による二冊目の単著で、対象となっているのは占領期の日本政治である。

日本の近現代において、占領期は明治維新に次ぐ大きな変革期であり、日本政治史研究や日本現代史研究をはじめ、さまざまな分野で多くの優れた研究が発表されている。

占領期研究が本格化したのは、一九七〇年代に入ってからのことであつた。日本の占領政策を主導した米国でGHQ/SCAP文書が公開され、更に、ダグラス・マッカーサー、チャールズ・ケーティス、マイロ・ラウエルなど占領に携わつたGHQ高官の文書も活用できるようなつたからである。

占領期の研究が蓄積されるなか、本書が刊行された意味は何か。以下、章別に内容を紹介し、評価を述べたい。

なお、本稿は、評者が二〇二三年三月一八日の占領・戦後史研究会で行つた報告が元になっている。

一、本書の構成と各章の概要

本書の構成は以下の通りである。第一章から第三章は既出の論文を加筆修正したもので、第四章は書き下ろしである。

序「あのお話はなかつたことにしてください」

第一章 広島カープの生みの親・谷川昇の軌跡

第二章 「バルカン政治家」三木武夫の誕生

第三章 フリーメイソンと日本の有力者たち

第四章 田中角栄伝説と戸川猪佐武『小説吉田学校』

おわりに「道義のない民主主義はありません」

序において、著者が強調するのは、占領期研究において日本側の史料を活用する必要性である。既述のように、占領期の研究は、連合国軍最高司令官総司令部文書が米国で公開されてから進展し、多くの研究成果が挙げられてきた。ただ、残されている史料には作つた側の意図が反映

されており、アメリカ側の視点から占領期を分析することになりかねない。片方の当事者の視点による歴史を相対化するためにも、日本側の史料を活用すべきというのである。

第一章では、特異な経歴を有する谷川昇が検討されている。谷川は高等文官試験には合格していないにも関わらず、戦後に山梨県知事、内務省警保局長となった。この異例の出世は、GHQ対策が必要となる占領期という特異性による。一九四七年四月の衆院選に出馬して初当選を果たすも、ほどなく公職追放となった。その要因は、谷川警保局長時代に日本の警察関係者が実施していたGHQ民政局(GS)のケーディス次長に対する内偵調査によるものと著者は推測する。谷川自身は関与していなかったものの、その責任を取らされたという。追放後、谷川は地元広島のプロ野球球団カープの創設に携わった。そのカープとの関わりは突如断たれた。谷川を忌避していたGSのホイットニー局長の意向が付度されたためである。占領終結前に谷川の追放は解除されて代議士になったが、一九五五年の衆院選で当選する直前に突如死去した。

第二章は、占領期に台頭した三木武夫についての考察である。三木は、政治資金や派閥などの点で実態以上に良くみられていた。三木がメディアとの関係を重視していたからである。三木の政治活動を支えたのは、知識人や学者のほか外交官や知米派で、とりわけ福島慎太郎、平澤和重、松本瀧蔵の三名が重要な人脈であった。一九四八年一〇月に芦田均内閣が昭和電工疑獄で総辞職した後、後継首班となる可能性があったのは、三木のほか、民主自由党総裁の吉田茂と幹事長の山崎猛であっ

た。本章では、芦田後継をめぐる三者の動きが詳細に検討される。三木首班は実現しなかったものの、三木首相の可能性を政界に認識させた。外交官・知米派という三木の人脈がGHQとの工作においては重要で、三木の政治活動にプラスとなった。GHQ情報を巧みに駆使しながら政界において巧妙に動く様子は、三木の「バルカン政治家」というあだ名にふさわしいものであった。

第三章は、「秘密結社」としてのイメージが際立つフリーメイソンと、日本の政界、皇室との関わりを扱った章である。占領期に日本人がフリーメイソンに入会した目的はGHQとの交渉ルートの確保にあり、このルートを確保することで、公職追放の解除、財産関係の特例措置を受けようとする思惑から入会した。フリーメイソン側は昭和天皇を入会させるべく天皇との会見を実現させようと働きかけた。しかし、天皇周辺が警戒し、昭和天皇のフリーメイソン入会は失敗した。フリーメイソンが日本政治に影響を与えた可能性がある出来事として、日本とフィリピンとの賠償交渉がある。鳩山一郎首相、松本瀧蔵官房副長官がフリーメイソンだったことから、フィリピン側がフリーメイソンを活用したと推測される。こうした例はあるものの、フリーメイソンには日本政治を動かすほどの力はなかった。

第四章は、田中角栄のイメージ形成に大きな影響を与えた戸川猪佐武の著述を検討した章である。占領期に、田中は当選一回の衆議院議員で法務政務次官に就任した。この就任は、田中が山崎首班事件に際して吉田茂に直接首相となるよう訴えたことが影響したという説がある。しか

し、田中以外にも当選一回の政務次官は存在しており、さほど異例ではない。著者の緻密な検討によると、戸川は、田中と山崎首班事件との関わりについて、あらゆる点で事実を記していない、という。戸川が田中の活躍という事実に対することを書き始めたのは、戸川がもともと近い関係にあった河野一郎と断絶したことが影響している。戸川は佐藤榮作に接近し、やがて田中との関係も構築した。以後、田中にとって都合の良い記述を繰り返していく。特に田中と吉田との関係が強調され、田中が「吉田学校」の系統にあることが強調されていた。田中が「保守本流」ではなく、「吉田学校」の系統とされたのは、「保守本流」では福田赳夫が正統性を有すること、宏池会との連携が必要だったこと、に依る。戸川は、小説という形で田中を戦後政治における主流派に位置づけ、その田中のイメージを広めるうえで重要な役割を果たした。

おわりにでは、占領期における公職追放の重要性、すなわち、公職追放がGHQによる日本政治への介入手段として大きく作用したことが強調される。特に鳩山一郎の追放は、GHQが日本国民の民意を踏みこじったもので、戦後政治が民意の否定から始まったことを意味した。他方で、鳩山の追放によって吉田茂、さらには吉田の系統に連なる佐藤栄作や宮澤喜一が台頭した。占領は戦後日米関係の起点であり、戦後日本の原点と位置づけられる。最後に著者は、鳩山が追求した「デモクラシー」が独立後に実現したのか、として戦後民主主義の意味を問いかける。

二、評価と考察

本書が戦後政治史研究に貢献するところは多大である。独立した各章は、それぞれがこれまでの先行研究では全く、あるいはほとんど検討されてこなかった人物や事柄について検討して解明している。章と章との関連が全くないかといえそうではない。公職追放の問題、GHQ要人とのつながり、山崎首班事件などは複数の章に関わる。検証は緻密で、さながら犯人のアリバイを一つ一つ崩していく推理小説を読んでいるような感覚にもとらわれる。著者が反論、反証を与えないようにするべく徹底した検討を加えているからである。この点は第四章において特に顕著である。

本書の検討を支えているのは、著者による個人史料の発掘、関係者へのインタビューである。著者は前著『自由民主党の誕生』（木鐸社、二〇一〇年）から、渉猟した文献、史料などを緻密に分析し、論理的に検討していくという政治史研究の王道の方法を一貫してとり続けている。それゆえに、実証が堅実であると同時に、推測の部分についても説得的なものとなっているのである。

多くの成果をあげているなかで、芦田均内閣の総辞職後の首班問題と、田中角栄伝説の検討が特に重要と感ぜられた。

昭和電工事件により芦田内閣の総辞職が確実となり、芦田後継をめぐる、民主自由党内の吉田と山崎との争い、連立内閣の一角を占めていた国民協同党の三木の動き、GSの思惑が絡んで複雑な様相を呈した。従来、芦田の後継に吉田茂が決まるまでの経緯については、山崎首

班事件が特に注目されてきた。三木首班をめぐる動きはほとんど検討されず、マッカーサー・吉田会談についても、会談内容を詳細に検討しないまま、マッカーサーから首班となるよう勧められたとする吉田の回想をそのまま鵜呑みにしたものも多い。著者は、山崎首班事件が本格化する前の三木首班をめぐる動き、マッカーサー・吉田会談の内容、山崎首班事件が最終的に山崎の議員辞職によって終焉し、吉田が後継首班となる過程を丹念に検討している。特に、山崎が首相就任への意欲を秘めつつ、吉田との関係で板挟みとなり、最終的に議員辞職に至った経緯を、山崎が残した史料も活用して明らかにしたことは意義深い。

また、山崎首班事件について、山崎の議員辞職の処理が先か、首班指名選挙が先かという、従来の研究の盲点を突く分析がなされている点も重要である。日本国憲法第六七条で、首班指名選挙が全てに優先すると定められている以上、山崎の議員辞職の承認よりも首班指名選挙を先に行うことは十分理にかなっていた。吉田茂が首班に指名された正統性も問われかねない問題である。著者は詳細の経緯は不明としつつ、吉田の側近だった小沢佐重喜の主導により山崎の議員辞職が先に処理され、これにより山崎首班事件は完全に潰えたとする。政治過程、権力闘争の分析のみならず、制度面にも目を配ることができる深い洞察力を著者が有しているからこそその分析である。

田中角栄伝説の検討は、本書の白眉である。田中は、最も広く一般に知られている戦後日本の首相であろう。その田中のイメージ形成に影響を及ぼしているとして著者は、政治評論家の戸川猪佐武が著した政治小

説に注目する。

政治小説はフィクションであって、政治史研究で政治小説の内容を検討する必要はない、という批判があるかもしれない。しかし、その政治小説が政治家の評価に関わり、研究者も小説の内容に影響を受けている状況であるならば、その内容を吟味して批判する意味は大きなものとなる。政治小説の検討において先鞭をつけた点でも本書は貴重である。

著者は戸川による田中の描写が時期によって変化していることに着目し、その変遷を一つ一つ追い、さらに実際に田中がどのような政治的な行動をとっていたのかを実証している。その結果、既述のように、山崎首班事件についての叙述があらゆる点で不正確なこと、田中が吉田茂に連なる政治家として強調されることを望んで戸川が応えたこと、などが明らかにされていく。

ここに本書の副題にある「保守本流」が関わってくる。「保守本流」では福田との差別化ができなくなるという著者の指摘は説得的である。他方で、「吉田学校」という位置づけは、どこまで田中に利したのだろうか。一九六〇年代に吉田茂が再評価されて間もない時期に、「吉田学校」の一員に位置づけられたことは確かに田中にとって有益であっただろう。他方で、一九七二年の自民党総裁選の時には、田中派、大平派、福田派が保守本流と位置づけられていたという指摘がある（福永文夫「保守本流」再見——福田越夫と大平正芳」増田弘編『戦後日本保守政治家の群像』ミネルヴァ書房、二〇二三年）。この段階で田中が「保守本流」の一員とされていたならば、たとえ福田との差別化がなされないとして

も、「保守本流」に位置づけられることは田中にとって重要だったように思われる。

また、一九七〇年代以降、田中がどのように位置づけられていくのか、という点も重要であろう。「吉田学校」と位置づけられ続けているのか。「保守本流」の政治家とされているのか。あるいは両方なのか。現在でも「保守本流」については研究書や研究論文、メディアなどで広く使われているのに対して、「吉田学校」という表現はあまり聞かれなくなっているように思われる。「保守本流」、「吉田学校」の更なる検討が必要となろう。

巷間流布している田中角栄のイメージの不正確さをはじめとして、本書では多くのことが明らかにされた。日本側の史料の発掘、関係者へのインタビューを元に史実を明らかにして論を組み立てるといふ、既述した著者の研究方法による成果である。すでに多くの優れた研究がある占領期の政治史研究においてさえ、地道な史料収集と分析によって新たな史実が浮かび上がり、既往の評価を変えられることを本書は示した。引き続き著者が、占領期のみならず、独立後の日本政治史研究においても多くの研究成果を挙げられることを期待してやまない。